



日本精神神経学会 認知症診療医テキスト2 —症例とQ & Aに学ぶ—

日本精神神経学会
認知症委員会 編
新興医学出版社
2021年10月 192頁
本体価格 3,200円+税

日常診療は多くの問答からなっているが、特に認知症は当事者の家族の方などから多くの疑問（質問）に対する答えが求められることが多い疾患のように感じる。またその一方で認知症患者と対峙する場合、症状の複雑さや対処法の困難さも相まってさまざまな疑問を抱く医療者も多いのではないかと思う。

本書は認知症診療に必要な知識や診療技法の向上に供すべく、複数の症例とその診療のポイントが記載されている。提示症例としては、「手順を踏んで認知症を診断・理解する」ための5症例、「認知症以外の疾患から鑑別する」ための3症例、「工夫が必要となる認知症の診療場面」の4症例、「若年発症認知症の患者と家族を支える」の4症例と合計16症例である。これらの症例の各々について具体的な疾患の知識を深めることに供する形でQ & Aが提示されている。また後半のQ & A集は認知症に関する諸々の疑問に対して経験に裏付けられたアドバイスやエビデンスに基づいた解答からなっている。

認知症領域は病態解明や治療法の進展が求められているなかであって、困っている患者に対峙し、家族をはじめとする援助者を支援するうえで診療医においては日々の細やかな対応が求められている。こうした実際の診療の場においてはさまざまな疑問が生じるが、その臨床疑問は背景疑問と前景疑問に大別される。「なぜこの患者はこうなったのか？」という種類の疑問（背景疑問）に答えるためには疾患に関する基本的な知識が重要であるが、その字義的な知識のみで「これからこの患者はどうなるのか？」といった種類の疑問（前景疑問）に答えようとするとしばしば判

断に窮する場合がある。

前景疑問に最適解を出していくためには背景疑問に関する知見だけではなく、認知症臨床における前景疑問を扱った研究や報告を十分に正しく読んで誠実に現場に適用していく努力が必要となる。そのためにまず必要なことは症例検討会などを通じて、臨床経験に基づく多角的な視点から症例を把握することがある。その一方でそれらの症例における背景となるエビデンスやさまざまな対処や治療的アプローチによるアウトカムを記述した知見への理解が必要になる。このような総合的な知識をアップデートするためには関連する論文を可能な限り読みこなし、重要なエビデンスを検索・抽出し、吟味することが必要である。そのためには論文抄読会とエビデンスの解釈におけるディスカッションが積み上げられていくことが望ましい。

実際の精神科医療、認知症臨床の最前線で労している診療医を始めとした医療関係者はさまざまな現場でその対応に追われている。そのなかで症例検討会や論文抄読会に参加するための機会は限られているのが実情のように思われる。本書でのQ & Aは88個にも及び、認知症における実臨床を網羅的にカバーしており、日々の臨床の現場で認知症診療に労している医療者が感じている臨床疑問に対して丁寧で示唆に富む内容が記載されている。そのような面で本書は症例検討会や抄読会をもつことが難しい認知症診療医にとって臨床疑問に対する答えを得るための補完的な役割を担っているようにも感じられた。

序文のなかで患者と対峙するうえで「知っていること、知らないこと、知っていること、知らないことさえ知らないこと」の3つのレベルに区別して対処することが求められる」と述べられている。ここで、「知らないこと、知っていること」はソクラテスによる『無知の知』を想起させる。ソクラテスが説いたとされる無知の自覚が真の認識に至る道という意味で大切な視点である。また「知らないことさえ知らないこと」については論語の『知らざるを知らざると為す』（為政第二）という言及にも通じるように思われるが、知らないことの自覚は新たな学びを促進し、有意義な知識を加えて成長することにつながるように改めて思う。

（谷井久志）